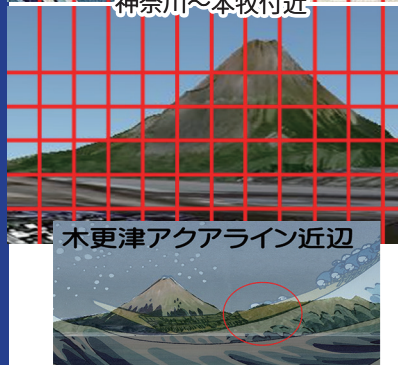


神奈川〜本牧付近



木更津アクアライン近辺

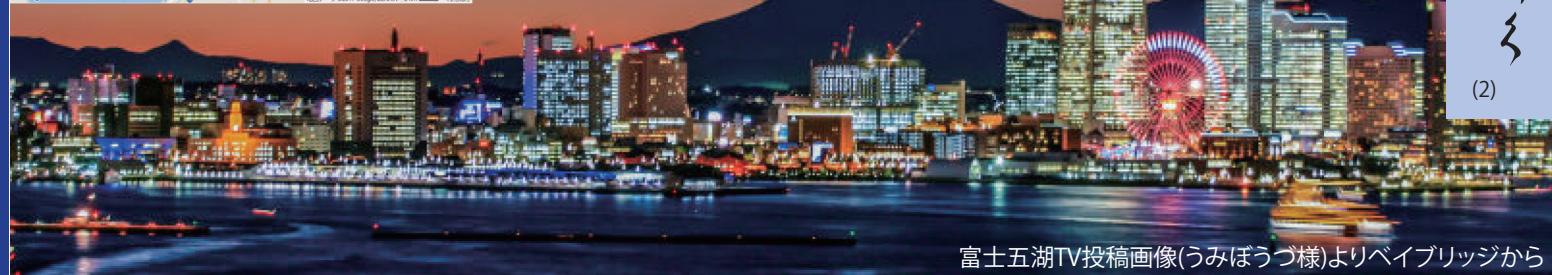
神奈川沖は現在の本牧。しかし、視点は木更津と本牧を結ぶ航路上で、木更津付近と推測できる。この説は概知です。



神奈川沖浪裏 富嶽三十六景(1831年出版)

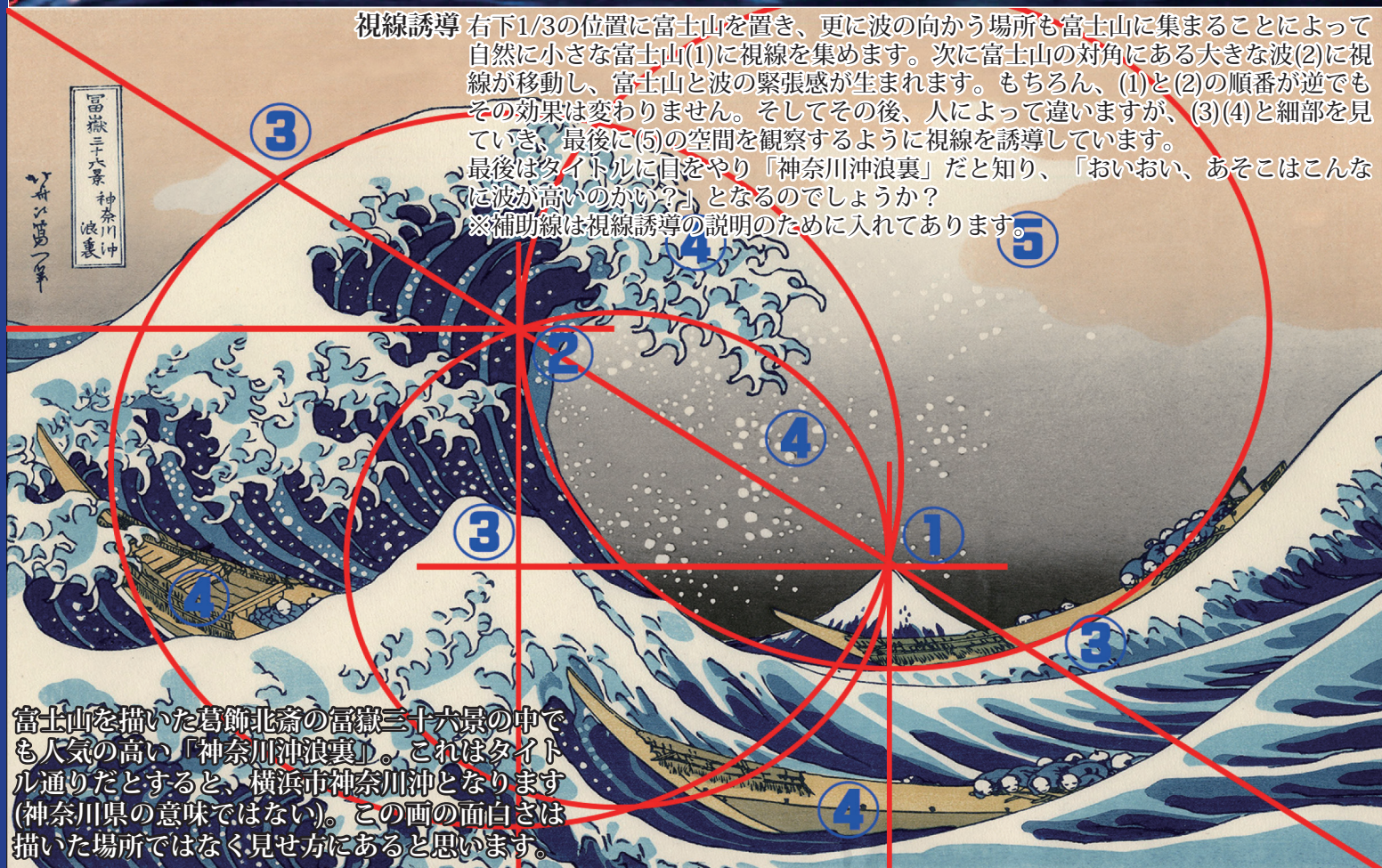


推定視点位置



富士五湖TV投稿画像(うみぼうづ様)よりベイブリッジから

視線誘導 右下1/3の位置に富士山を置き、更に波の向かう場所も富士山に集まることによって自然に小さな富士山(1)に視線を集めます。次に富士山の対角にある大きな波(2)に視線が移動し、富士山と波の緊張感が生まれます。もちろん、(1)と(2)の順番が逆でもその効果は変わりません。そしてその後、人によって違いますが、(3)(4)と細部を見ていき、最後に(5)の空間を観察するように視線を誘導しています。最後はタイトルに目をやり「神奈川沖浪裏」だと知り、「おいおい、あそこはこんなに波が高いのかい?」となるのでしょうか?
※補助線は視線誘導の説明のために入れてあります。



富士山を描いた葛飾北斎の富嶽三十六景の中でも人気の高い「神奈川沖浪裏」。これはタイトル通りだとすると、横浜市神奈川沖となります(神奈川県の意味ではない)。この画の面白さは描いた場所ではなく見せ方にあると思います。

北斎の波表現遍歴

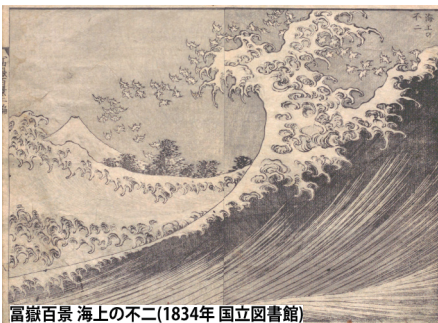
北斎は堀之内(東京杉並区)の日蓮宗妙法寺にある通称「波の伊八」の彫刻に触れていて、伊八に関心を抱いていた。ちなみに伊八の取り組んだ波の有名な彫は千葉県明王山飯縄寺(40代半ば)の作品、東頭山行元寺(50代後半)の作品にあり、その原風景は千葉県房総の大東岬から見た波であると言われ、北斎も確認のため南総の旅に出ています。このことから一説には「神奈川沖浪裏」の浪の部分は外房の波だと唱える人もいます。



賀奈川沖本空之図(1803年 国立図書館)



おしおくりはとうつぜんのづ(1805年 国立図書館)



富嶽百景 海上の不二(1834年 国立図書館)

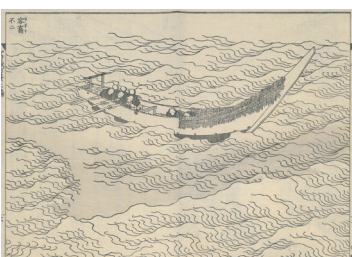
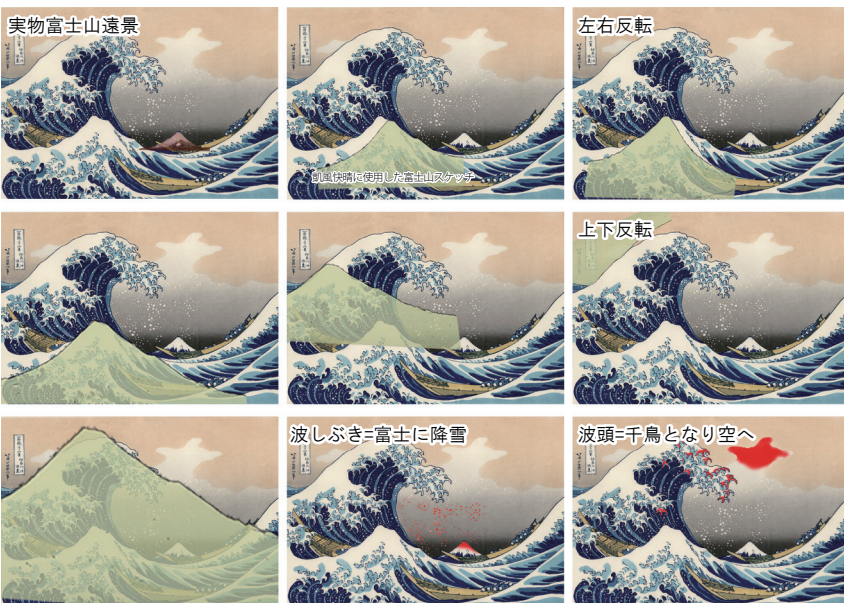


右画像は本堂欄間に伊八の彫がある飯縄寺。

波の表現に当時の人が互いに影響し合っており、北斎は苦心の果て、波の伊八の波をカッコイイと考え採用し、おそらく彼も実際に荒ぶる波を見に行っていたのでしょう。何でもかんでも北斎の偉業にすることはかえって北斎に失礼であり本人には迷惑なことです。

波頭のひとつひとつの表現は「シャッターの目」などというファンタジーではなく、日本の高度な漫画表現の一部だと認識するべきでしょう。

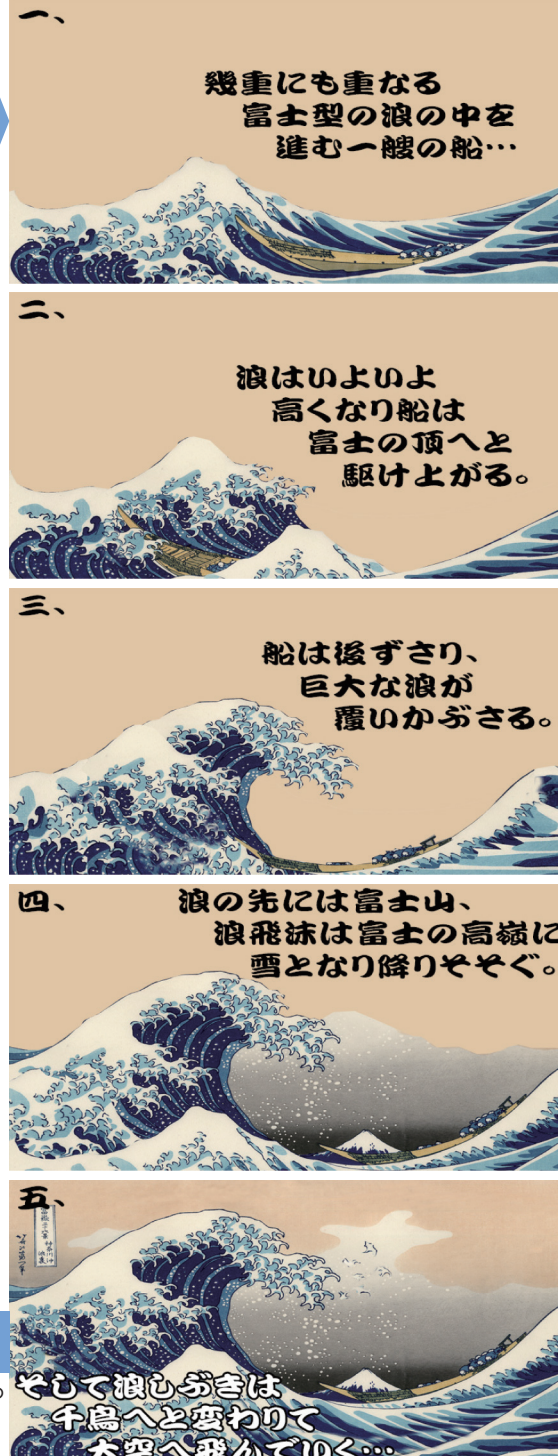
画に隠された富士山



北斎は富士山のシルエットを意図的に複数入れ込んでいます。それは、「凱風快晴」のスケッチを行った場所の富士山で右に宝永火口が張り出したばかりの形状をしています。

波の中に富士山を隠す構図は「富嶽百景二編 容斎不二(うねりふじ)左画」の中に見られます。またこの画には「神奈川沖浪裏」にある押送船もあります。

描かれている三艘の船は実は一艘で時間経過を暗示している



新説… 神奈川沖浪裏を分解すると5コマのシーンからなるアニメに
NHK歴史探偵にて模型を使用した実験槽で再現してもらいました

最初に戻る

「神奈川沖浪裏」のポイント

1. 波が碎ける表現の漫画的手法とその追及
 2. 視線誘導を巧みに操った富士山中心の構図
 3. 富士山の相似形を隠したサブリミナル効果
 4. 船の相似形を配置したアニメーション効果
- 以上からダイナミックな動きを感じさせる



富士五湖ドットTV
fujigoko.TV
<https://www.fujigoko.tv/>

他の北斎視点詳細はこちらから。記:久保寛